初期地方寺院における単弁軒丸瓦の成立

－「棒状子葉」単弁八葉蓮華紋軒丸瓦の系譜と展開　1　－

昼間　孝志

要旨　「棒状子葉」と呼ばれる単弁蓮華紋軒丸瓦は、比企地方を中心に分布する、埼玉県内では初現の単弁軒丸瓦である。この軒丸瓦の系譜については、過去に「寺谷廃寺の素弁軒丸瓦説」や「上植木廃寺式軒丸瓦説」などを通して議論されてきた。「棒状子葉」軒丸瓦が最も多く出土する勝呂廃寺の創建瓦の中には、外区外縁（斜縁）に圏線状に廻る凸線が二重または三重に確認できるものがあり、斜縁の外区に圏線を備えた「上植木廃寺式」の特徴を持っていることが明らかになった。更に平坦な弁や中房なども上植木廃寺式に共通することから「棒状子葉」単弁軒丸瓦は上野国上植木廃寺の影響を強く受けて成立した可能性が高く、これまで（国分寺創建期）より50年余り遡って上野系の瓦生産が南比企窯跡群で始まっていた可能性も出てきた。また、比企地方には、勝呂廃寺創建期の平瓦や基壇建物を伴う寺院跡や関連遺跡が半径数㎞内に数か所展開する。一部の遺跡は出土遺物から官衙との関連した寺院の可能性が指摘でき、関わった氏族が南比企窯跡群を背景にこの地域に仏教や政治施設の拠点を築き上げていたことが想定される。一方、南武蔵の影向寺の単弁軒丸瓦も当初、比企地方の氏族との関連性から成立したものと考えられてきたが、東京湾を隔てた房総地域の寺院の瓦に関連性が認められることから、比企地方の「棒状子葉」とは異った系譜で成立したと考えられる。この単弁軒丸瓦の多くは創建瓦として用いられ、供伴土器との関連からその成立と展開は７世紀第４四半期頃から８世紀初頭にかけてと考えられる。

はじめに

我が国における単弁蓮華紋軒丸瓦（以下、単弁軒丸瓦）の出現は、大和吉備池廃寺の創建瓦に始まり、大和山田寺（以下、山田寺）などを経て全国に展開する。代表的な単弁軒丸瓦の様式である「山田寺式」は、一つの系譜として捉えるには問題があるため、特徴的な寺院の瓦を系列名に冠して分類されている。それによって一つの系列の変遷や系列上の繋がりなどが明白になったばかりでなく、製作技法の観点からも山田寺の創建とほぼ同時期に瓦づくりや寺づくりが始まったと考えられる例が明らかになってきた。

一方、従来地方の寺院から出土した山田寺に類似した紋様を持つ軒瓦は「山田寺系」と呼称されてきた。「山田寺式」の特徴は四重の重圏紋で表現される周縁、明瞭に抽出された弁などだが、畿内から離れるほど各独自の展開をしている場合が多い。関東地方では主に群馬県伊勢崎市の上植木廃寺を中心とした地域、千葉県印旛郡栄町の龍角寺を中心とした地域に分布し、古くから注目されてきた。しかし、これらは「山田寺式」とは異なり、何らかの影響を受けながら独自の「型式」として成立したものである。言い換えれば「上植木廃寺式」「龍角寺式」と呼称するのが適切であろう。前者は東山道、後者は東海道に属し、瓦の分布や展開も異なる。

今回取り上げた「棒状子葉」単弁軒丸瓦は、平坦な弁に細い棒状の子葉を持つことから「棒状子

葉」の単弁と地元の研究者間では呼称され、その系譜についても様々な議論が展開されてきた。

本稿では、比企郡周辺に分布する「棒状子葉」単弁軒丸瓦と関連する遺跡の創建期の瓦について述べ、その系譜の成立と展開について考える。

1　武蔵国の単弁軒丸瓦

A　寺谷廃寺

寺谷廃寺は比企郡滑川町大字羽尾に所在し、標高約65mの丘陵上に立地している。付近には6世紀後半に築造された前方後円墳である月の輪古墳を中心とする後期古墳群、平谷窯跡、羽尾窯跡などの7世紀前半の須恵器窯跡が点在する。また、市ノ川や滑川の支流が形成したその数数百といわれる溜池が谷奥に造られており、その築造は古代まで遡るといわれている。

寺谷廃寺は発掘調査が行われておらず、伽藍等の状況などについては不明であるが、採集された瓦からその様子が少しずつ明らかになってきた。瓦の採集地点は大きく分けて2箇所あり、丘陵の先端部に比較的古い瓦が多く、丘陵の奥まった現興長禅寺裏には新旧の瓦が混在して分布する傾向がある。

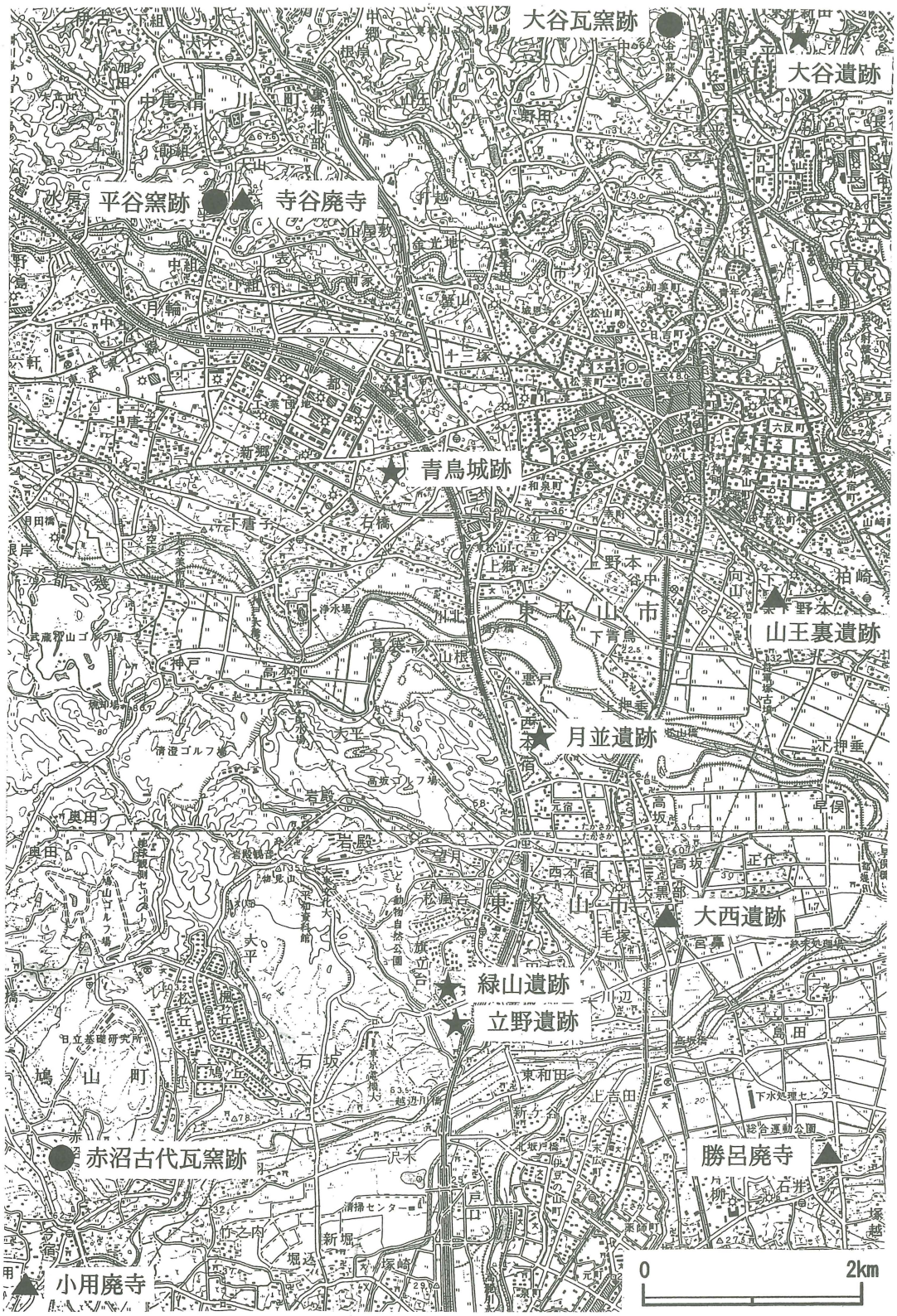
軒丸瓦は4種類あり、そのうち3種類の素弁八葉蓮華紋軒丸瓦が創建瓦である。いずれも紋様は似ているが、別笵である。この素弁軒丸瓦には軒平瓦は伴わなず、薄手の丸瓦・平瓦だけが組み合うものと考えられる。（註1）他の1種類は棒状子葉の単弁軒丸瓦で、小破片であるが、十葉と推定される。胎土などから三重弧紋軒平瓦との組み合わせが考えられる。

軒平瓦はいずれも顎部が剥がれているが、型挽三重弧紋と推定できる。現在確認されているのは1種類であるが、胎土の異なるものがあり、一部は異なる窯で焼成された可能性がある。

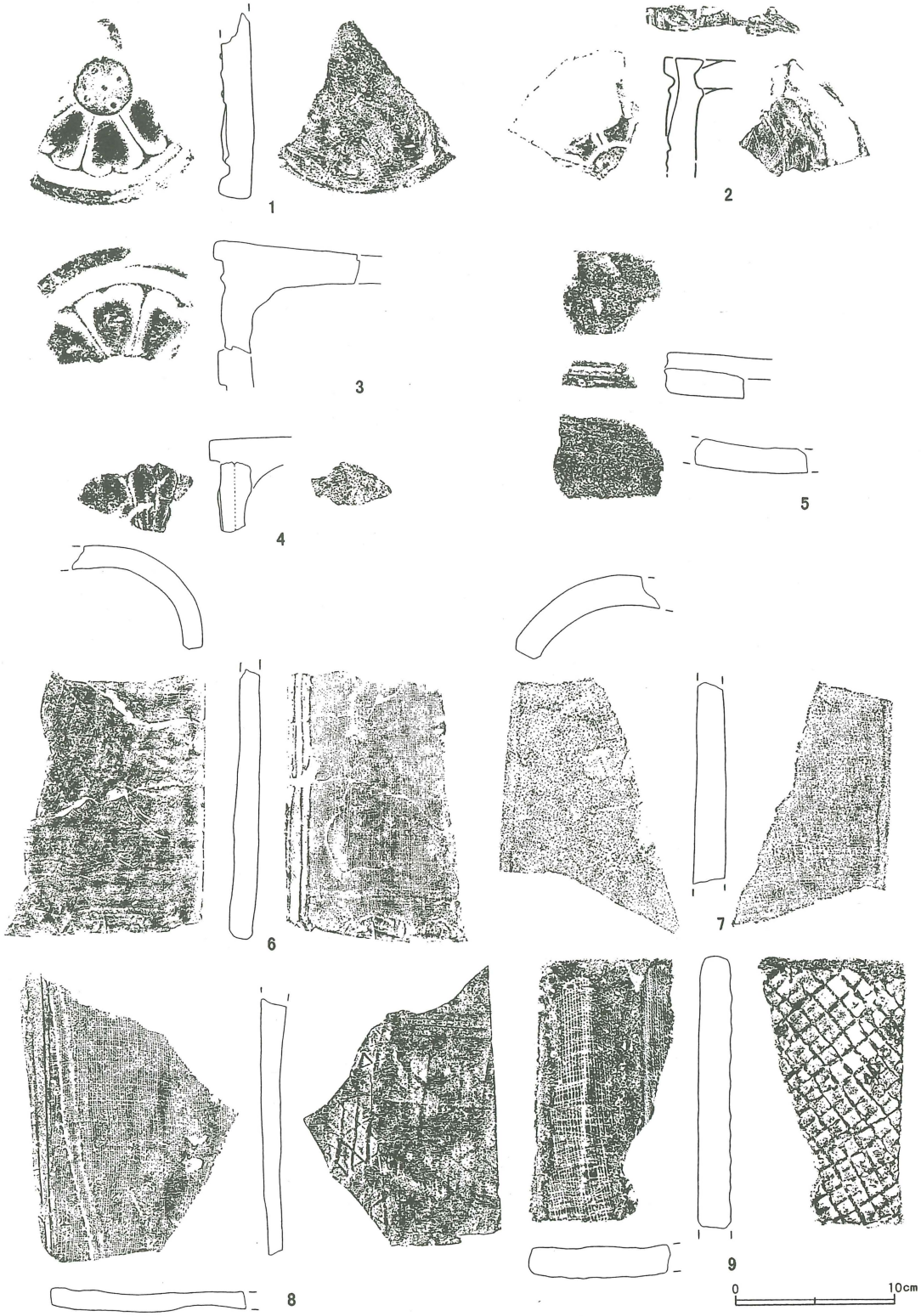
丸瓦・平瓦は素弁と単弁の二時期があるが、ともに丸瓦が少ない。素弁の段階（創建期）は薄手で、格子叩きを磨り消すものが主体である。単弁の段階は創建期に比べて厚手で、平瓦は格子叩きが主体である。また、単弁軒丸瓦及び三重弧紋軒平瓦、丸瓦、平瓦の一部は胎土を同じくするものがあり、同一の窯で生産されたものと考えられる。また、隣接する平谷窯跡（灰原）からは7世紀前後の須恵器とともに三重弧紋軒平瓦と薄手・厚手の平瓦が出土している。

a　素弁八葉蓮華紋軒丸瓦（第2図1～3）

1は推定直径14.8㎝、内区系11.2㎝、中房径3.7㎝である。全体的に弁や周縁に比べて、中房は低く、大きい。周縁は素紋の直立平縁で、弁との間はやや広い。弁は桜花状で、反転の切り込みがある。蓮子は1＋4で、間弁の延長線上に配置されている。2は推定直径約15㎝、中房径3.6㎝、瓦当厚1.6㎝と破片の状態は異なるが、1と2は周縁・弁・中房などの大きさが殆ど同じである。瓦当と丸瓦の接合は瓦当裏面の接合部を平坦に削り込み、丸瓦の広端部を両面削ったものを当てて接合する。接合状況からは薄手の丸瓦を接合したものと考えられる。3は1・2に比べてやや大振りで、直径は16.8㎝、内区径、12.5㎝、中房径2.8㎝と推定できる。この瓦の1・2との大きな相違点は、直径に対して中房が小さく、やや盛り上がった弁がやや縦長に表現されていることである。また、3は瓦がやや風化し、弁央付近の一部が恰も単弁の子葉を削り取ったように見えたことから、


大谷瓦窯跡
大谷遺跡
平谷窯跡
寺谷廃寺
青鳥城跡
山王裏遺跡
月並遺跡
大西遺跡
緑山遺跡
立野遺跡
赤沼古代瓦窯跡
勝呂廃寺
小用廃寺
0
2km

第１図　関連遺跡分布図



第２図　寺谷廃寺出土瓦

棒状子葉の系譜は「寺谷廃寺素弁軒丸瓦説」になった。しかし、この素弁の笵は周縁まで被るA型笵と思われ、笵型の大きさも単弁とは異なることから、この説を裏付けるような痕跡は見当たらない。

b　単弁十葉蓮華紋軒丸瓦（第２図４）

４は単弁十葉と考えられる軒丸瓦の弁の小破片である。弁は平坦であるが、子葉はやや高く、長い。胎土は混入物が多く、三重弧紋軒平瓦の一部と共通する。

B　勝呂廃寺

勝呂廃寺は坂戸市石井に所在し、坂戸台地の北東先端部の標高約22ｍの台地上に立地する。付近には勝呂古墳群や上谷遺跡など古墳時代後期の遺跡が点在する。勝呂廃寺は過去に何度かの調査が行われ、基壇の一部、掘立柱建物跡２棟、区画溝、道路遺構などが検出され、相輪や多量の瓦類が出土している。調査の結果、東西120ｍ、南北約70ｍの伽監地が想定されている。

勝呂廃寺の創建軒丸瓦は、単弁十二葉、単弁十葉、単弁八葉の「棒状子葉」である。これらは（建物によって）多少の時間幅を持つが、概ね創建期の軒を飾った瓦として捉えられる。上記の「棒状子葉」軒丸瓦は合わせて５種類確認されているが、細片が多く、笵種は増減する可能性もある。また、この軒丸瓦は厚手と薄手の２種類に大きく分けることができ、約半数は裏面中央が窪んでつくられる。軒平瓦はいずれも顎の長い格子紋、型挽三重弧紋、廉状重弧紋の３種類が創建瓦と考えられる。赤沼古代瓦窯跡では単弁十二葉及び単弁八葉とともに格子紋の軒平瓦が出土しており、組み合わせの一部が明らかになっている。廉状重弧紋は笵型で製作されているが、赤沼古代瓦窯で生産されたか否かは不明である。丸瓦と平瓦は格子叩き、平行叩き及びその叩きを磨り消したもの、（指なでも含む）が創建期の一群である。

a　単弁十二葉蓮華紋軒丸瓦（第３図３）

中房と弁の破片で周縁などは欠損して不明。他の棒状子葉に比べて中房を高く作るのが大きな特徴である。中房は直径3.5㎝で、蓮子は１＋６である。弁は細長、平坦で、中房の大きさもほぼ同じで、弁端には反転の表現がみられる。同笵である赤沼古代瓦窯跡の資料を参考にすると、外区は平縁の直立縁で、内側に圏線は存在しない。周縁の側面は削られており、枷型か否かは不明である。丸瓦との接合は瓦当裏面に刻みを入れ、丸瓦を直角に近い状態で接合する。この場合、丸瓦は細い枠板を連結させた竹状模骨のような円筒型で作られた桶を使用する。

b　単弁十葉蓮華紋軒丸瓦（第３図２）

周縁を欠き、内区の１／２残存。同紋で八葉もある。弁は平坦で、「千鳥」字状の間弁と輪郭線で区画され、弁端の反転の表現は曖昧である。中房は約３㎝で、やや高く作り出される。蓮子は１＋６である。子葉は「棒状子葉」の中では太いが、弁が十弁なので細長くみえる。瓦当は厚く、裏面中央部が窪む。南比企窯跡群で生産されているが、赤沼古代瓦窯で他の棒状子葉とともに生産さ

れた可能性が高い。

c　単弁八葉蓮華紋軒丸瓦（第３図４）

周縁を含む弁の小破片で、九葉の可能性もある。周縁は斜縁で、傾斜面に重圏紋状の細い圏線の痕跡が二重または三重認められる。当初、細い凸線は笵が傷み、笵型の当たり方により圏線状にみえるとも考えた。しかし、細い凸線は等間隔に巡っており、明らかに圏線として笵に彫り込まれていたものといえる。周縁の側面は削られ、枷型か否かは不明である。弁は平坦で、「Ｔ」字型の間弁で区画される。弁の反転は点状に表現される。瓦当は厚く、単弁十葉（第３図２）と殆ど同じである。

d　単弁八葉蓮華紋軒丸瓦（第３図１）

素紋の周縁で、外区内縁は斜縁なっている。斜縁には圏線状に凸線が巡るが、笵型から外す際の状況によって凸線が現れない箇所もある。弁は平坦で、「Ｔ」字型の間弁で区画されるが、十二葉や十葉のように等間隔ではない。子葉は中房付近が細く、端部がやや太い。子葉の端部には粘土を削り取ったような痕跡があり、型から抜き取った後に子葉の長さを整えるために削り取った可能性がある。他に単弁十葉蓮華紋軒丸瓦に類似するタイプが１種類存在する。周縁は外側が太く、内側に細い圏線が二重に廻る。周縁の側面は削られているため、枷型か否かは不明である。

C　小用廃寺

小用廃寺は比企郡鳩山町小用に所在し、越辺川左岸の標高約40ｍの台地上に立地する。付近には南比企窯跡群が本格的に操業を開始する前に構築された７世紀前半の小用窯跡（須恵器窯）や７世紀中頃～後半頃に築造された西戸古墳群、川角古墳群などの中小の古墳群が点在している。小用廃寺からは軒丸瓦と丸・平瓦が少量出土してものの、付近の調査では寺院に関連する遺構は検出されていないが、最近になって大きく土取りをした箇所が確認されるなど基壇等の構築を想像させる要素も窺われる。

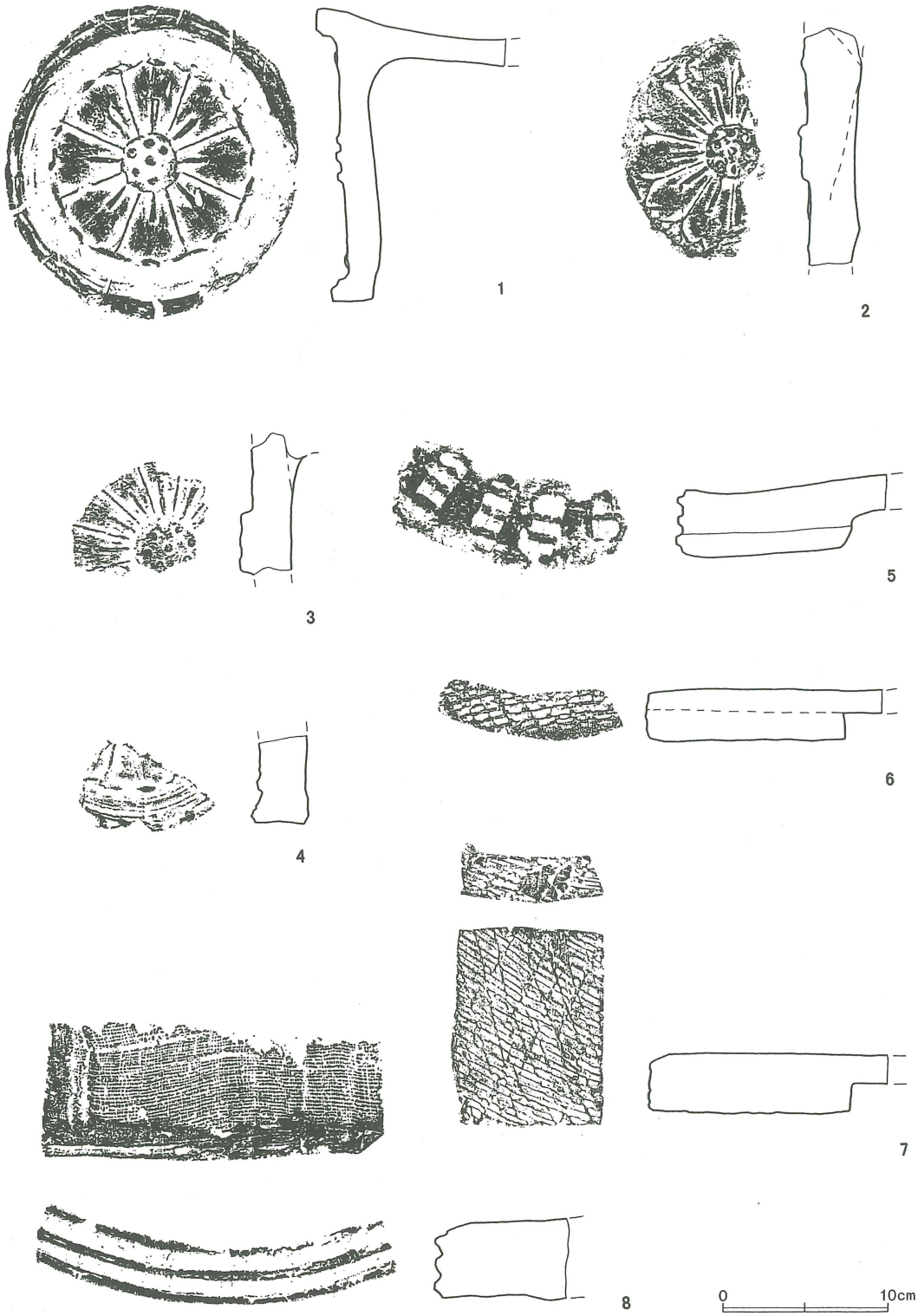
創建瓦の単弁十二葉蓮華紋は、蓮子の数は異なるが、勝呂廃寺と同笵である。

a　単弁十二葉蓮華紋軒丸瓦（第５図１）

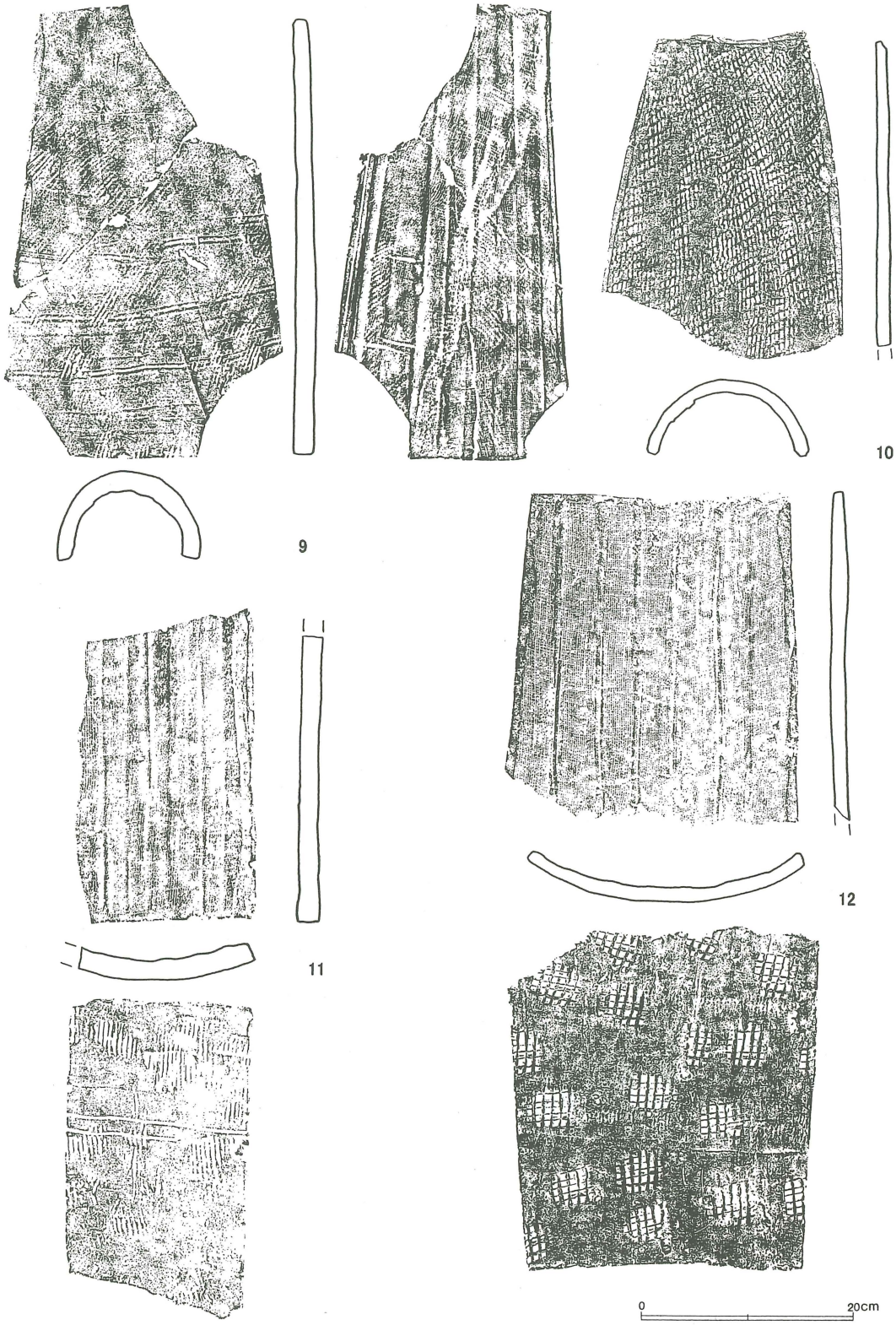
周縁の大半を欠いているが、紋様は明瞭である。弁は平坦で、弁を区画する輪郭線はないが、中房まで届く間弁によって十二等分される。子葉は中房に近い部分は細く、弁央付近はやや太くなる。中房は直径約３㎝と小型で、弁に比べて高く作られる。蓮子は１＋８で、外側の蓮子は中房の縁に沿って配置されている。

D　大谷瓦窯跡

大谷瓦窯跡は東松山市大谷に所在し、比企丘陵の南東斜面に２基構築され、１基が調査された。調査された２号窯は有階有段の半地下式登り窯で、瓦だけ焼成されている。規模は全長7.6ｍ、幅1.0ｍ、段の幅は0.3ｍで13段構築されている。



第３図　勝呂廃寺出土瓦(1)



第４図　勝呂廃寺出土瓦(2)

出土遺物は単弁十葉蓮華紋軒丸瓦、飛雲紋軒平瓦、丸瓦、平瓦などである。また、飛雲紋軒平瓦は当初は調査時に出土したものとされていたが、この軒平瓦は栃木県の下野国分寺や群馬県の笠懸窯跡群などで出土する飛雲紋と同笵・同系であることから何らかの理由で比企地域に持ち込まれ、後に混入したものと考えられる。平瓦はやや縦長で、枠板の幅が広い桶を使用している。

a　単弁十葉蓮華紋軒丸瓦（第５図１・２）

現在２点確認されている。直径は約18.7㎝。中房径3.5㎝である。周縁は平縁の直立縁である。弁は緩やかな「T」字形の間弁で均等に区画され、全体に平坦であるが、弁央部がやや高い。反転は明瞭に表現されていない。子葉は中房から弁央に取り付き、中房寄りが細く、次第に太くなる。中房は単弁十二葉ほどではないが、やや高く、蓮子は１＋６である。

E　関連遺跡（第１図参照）

比企郡内からは、上記の寺院の他にも下記の基壇建物や関連瓦が伴う遺跡が数箇所確認されている。いずれも東松山市及び滑川町内に位置して、台地や丘陵上に立地し、しかも古代東山道推定地に隣接した選地がなされている。概要は以下のとおりである。

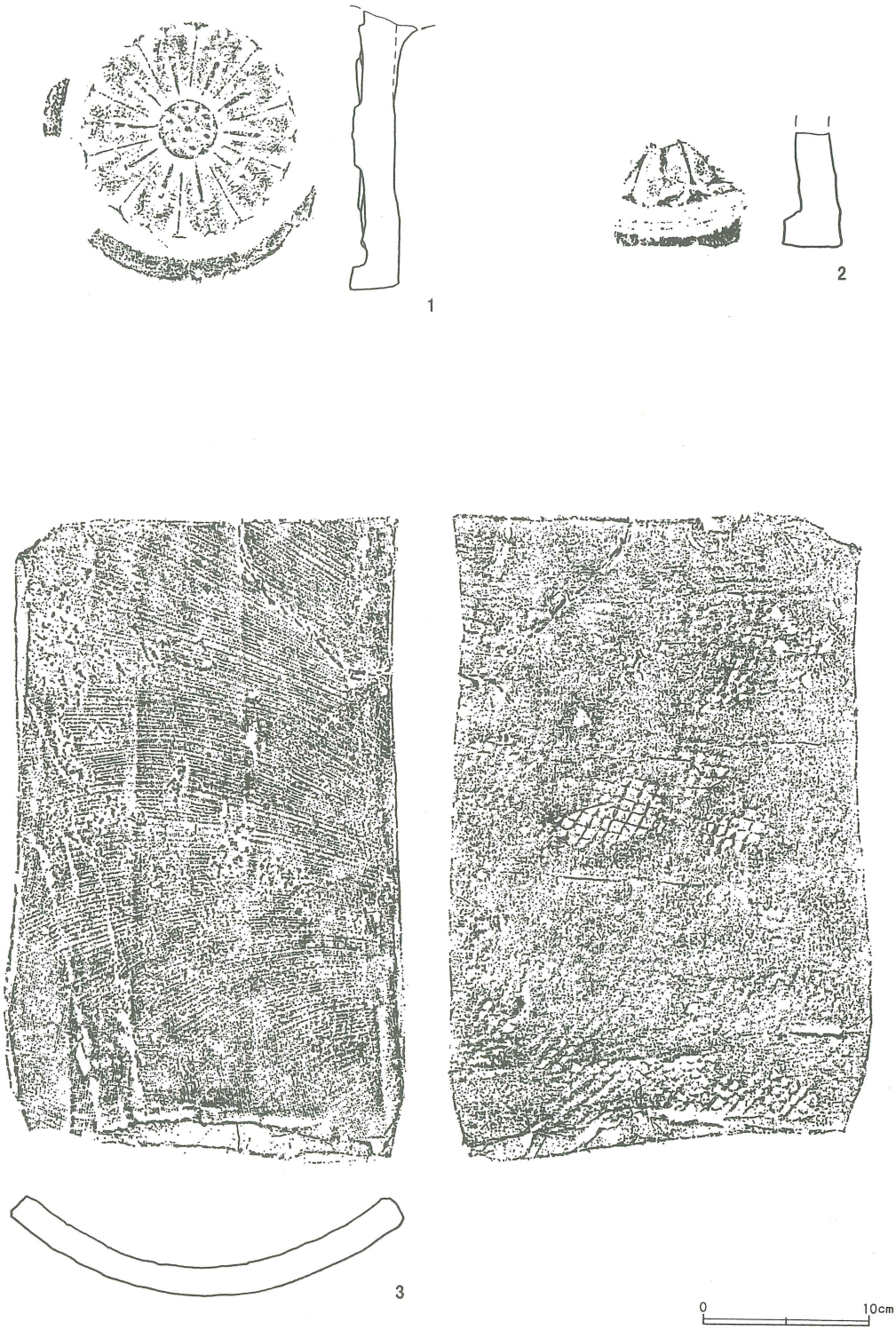
山王裏遺跡は台地上に立地し、基壇建物１基・掘立柱建物跡数棟が検出され、平行叩きの平瓦、風字硯等が出土した。基壇建物は一辺約10ｍの方形で、約55～60㎝の掘り込み事業が確認された。基壇周辺の竪穴状遺構と土坑からは勝呂廃寺と同種の平瓦が多数出土し（第６図）、供伴した須恵器から８世紀初頭の小規模な寺院跡の可能性が想定される。また、山王裏遺跡の南約100ｍに位置する西浦遺跡からは、多量の円面硯等が出土した。付近は「古凍」という地名が存在し、古くから比企郡家の推定地となっている。

大西遺跡は山王裏・中原遺跡と都幾川を挟んだ南側約１㎞の台地先端部に位置する。周辺の調査では既に古瓦が散布していることが知られており、区画整理の調査で基壇建物の南東部が検出された。基壇建物の規模は不明であるが、１ｍ以上の掘り込み事業が確認でき、最下層から勝呂廃寺と同種の平瓦を伴った土坑が１基検出された。土坑の検出状況から基壇建物は８世紀初頭以降と考えることができ、周辺では区画溝と思われる遺構も検出されていることから、小規模な寺院が存在した可能性がある。

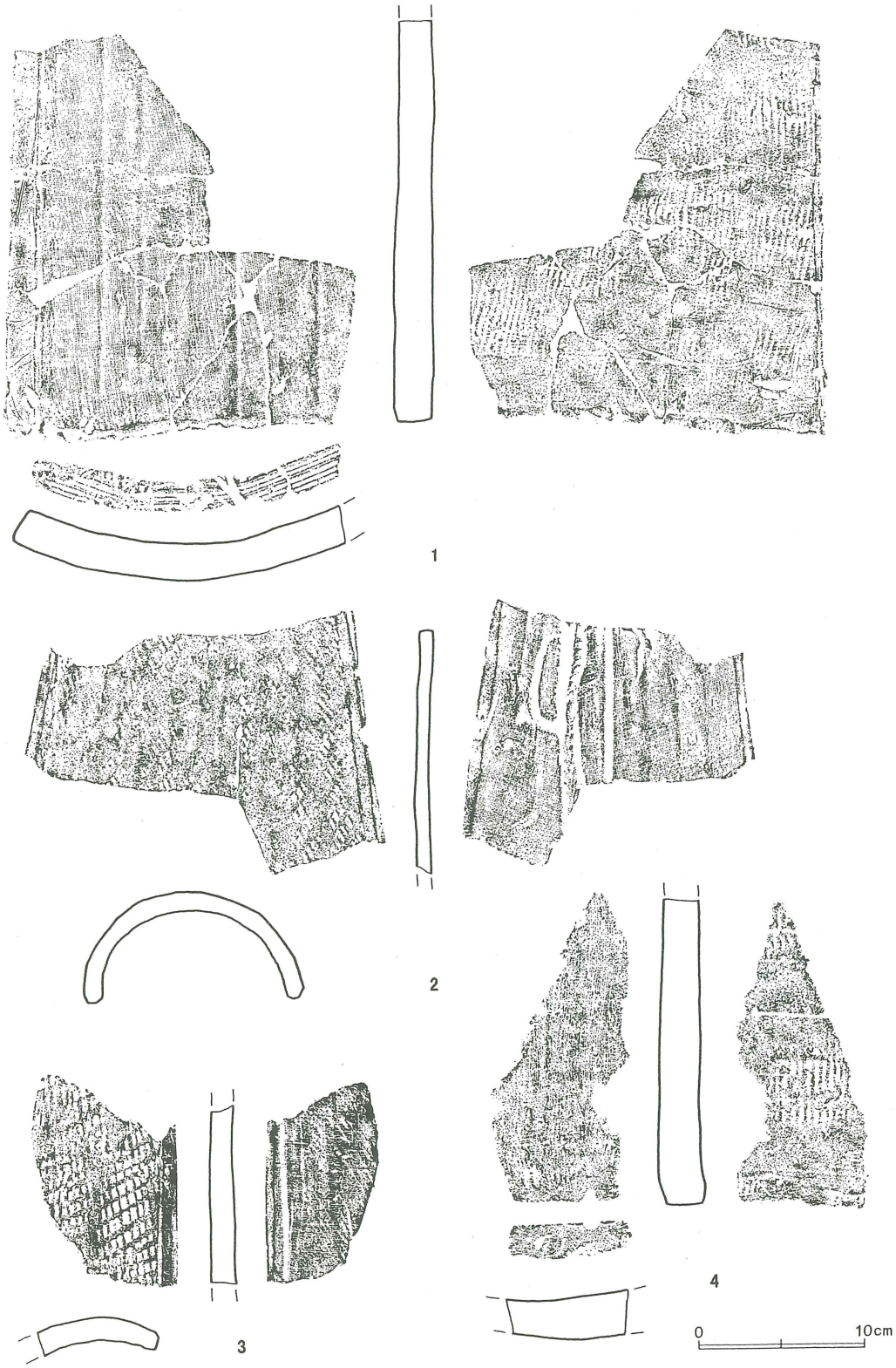
青鳥城跡は中世の館跡で、比企丘陵の先端部に立地している。調査によって本郭及び二の郭の一角で古瓦が確認されている。瓦はすべて平瓦で、溝から出土している。平瓦は凸面に平行叩きがあるが、勝呂廃寺と同系統であるか否かは確認できていない。

大谷遺跡は大谷瓦窯跡の南東約200ｍ、台地上に立地する。奈良・平安時代の住居跡のカマドに平瓦が使用されていた。この遺跡と隣接する大谷瓦窯跡出土瓦との関連性は不明であるが、住居跡から出土した瓦は二次的であることから、寺院関連遺跡の可能性は薄い。

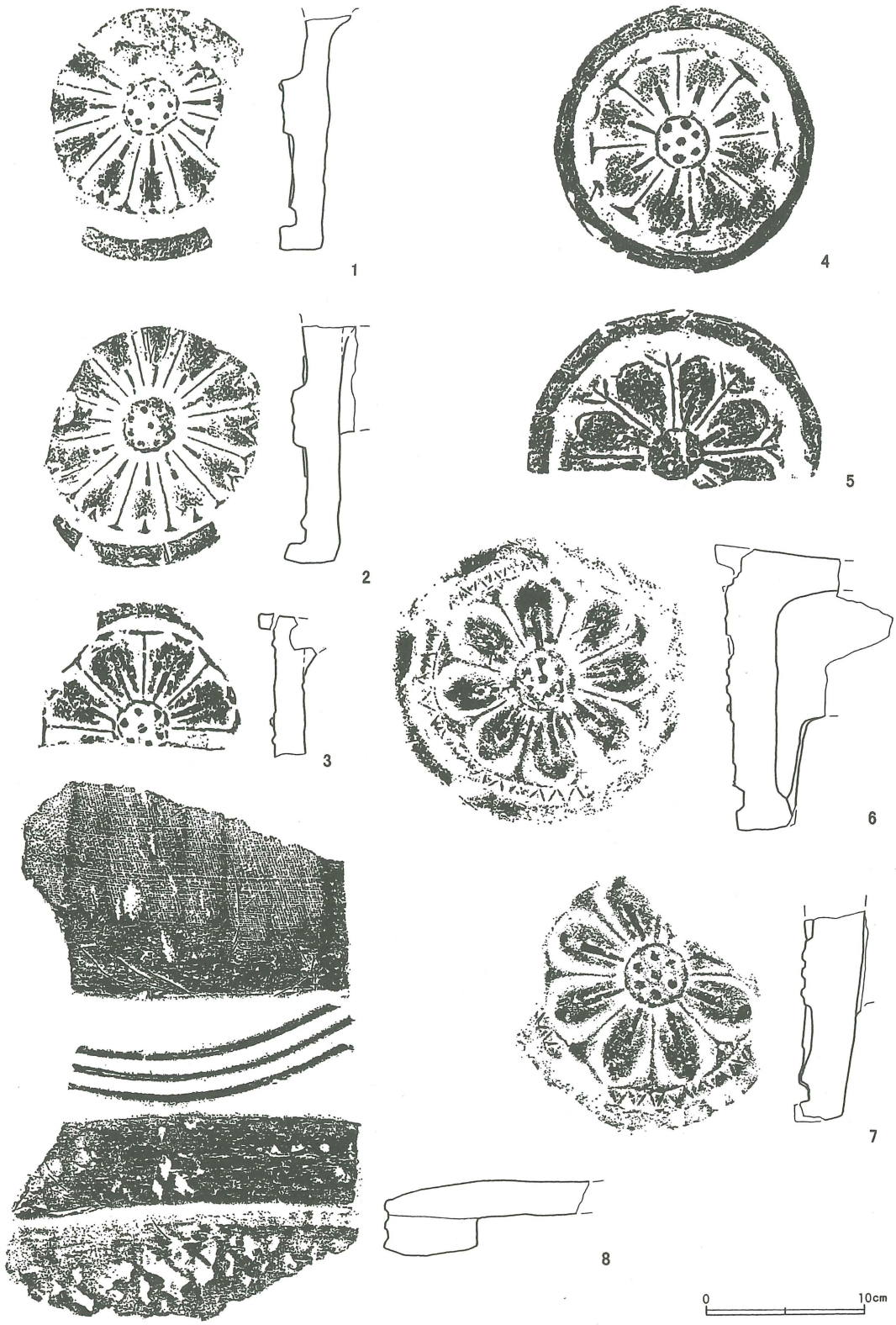
月並遺跡は古墳時代から奈良・平安時代にかけての集落遺跡である。諏訪山古墳群の北側に位置し、高坂台地縁辺付近に立地する。調査によって住居跡のカマドから勝呂廃寺と同種の平瓦が出土しているが、寺院との関連性は低いと見られる。



第５図　大谷瓦窯跡出土瓦



第６図　山王裏遺跡出土瓦



第７図　小用廃寺・赤沼古代瓦窯跡・石田瓦窯跡・影向寺出土瓦

下寺前遺跡は大西遺跡、月並遺跡と同じ高坂台地上に立地する古墳～奈良・平安時代集落遺跡で、溝跡と表採で平瓦が確認されている。溝跡が寺院や官衙を区画するものであるか否かは不明であるが、状況的に可能性は低い。

南比企窯跡群では赤沼古代瓦窯跡と石田１号窯で瓦生産が行われている。赤沼古代瓦窯は勝呂廃寺の専用窯といえるもので、一部は小用廃寺に供給されている。勝呂廃寺の創建瓦すべてがこの窯で確認されている訳ではないが、窯の構築されている谷の奥にはさらに数基の窯が存在するため、その可能性は高い。石田１号窯からは赤沼古代瓦窯に先行する薄手の平瓦が出土している。

緑山遺跡は岩殿丘陵の東側に位置し、瓦生産に関連した工房跡が検出され、瓦や塼が出土した。瓦の一部は勝呂廃寺で使用されたものと同じで、赤沼古代瓦窯跡で生産されたものである。瓦や塼の年代は７世紀末から８世紀初頭にあたることから、本来は勝呂廃寺に供給されるものであったと考えられている。

立野遺跡は緑山遺跡の同じ岩殿丘陵の南側に位置し、７世紀末頃の住居跡（カマド）から塼が出土している。塼は緑山遺跡のものと類似しており、工房跡である緑山遺跡から運ばれ、二次的に使用されたものと考えられる。

平谷窯跡は滑川町平に所在する。寺谷廃寺の創建期の瓦が出土する丘陵先端部と小谷を挟んだ西側斜面に構築されている。窯跡は２基または３基存在するといわれているが、未調査のため、詳細は不明である。遺物は道路工事の際に灰原と思われる地点から瓦と須恵器が出土している。瓦は寺谷廃寺の第Ⅰ期（素弁軒丸瓦）と第Ⅱ期（単弁軒丸瓦）の段階のものが混入して出土している。須恵器は７世紀初め頃の坏、蓋、高坏、甕などがあり、瓦生産と同時または先行して須恵器生産が始まった可能性が高い。瓦の供給先は寺谷廃寺と考えられる。

F　影向寺

影向寺は川崎市高津区野川に所在し、通称影向寺台という標高約40ｍの台地上に立地する。発掘調査によって、金堂基壇、塔基壇、掘立柱建物跡などが確認されているが、部分的な調査であるため、全容は不明である。また、最近では寺跡の南東で橘樹郡衙（評）の一部と考えられる遺構が確認され、寺跡から出土している文字瓦（荏原評）と合わせて建郡以前の官衙遺跡として注目されている。（註３）

影向寺からは棒状子葉の単弁八葉蓮華紋軒丸瓦２種類と国府系剣菱紋軒丸瓦、、三重弧紋、四重弧紋、五重弧紋の軒平瓦が確認されている。創建軒丸瓦には三重弧紋平瓦軒平瓦が伴うものと考えられる。平瓦は桶巻き作りで、凸面格子叩きが中心であるが、一部凸面に布目を持つものが含まれる。影向寺は創建後、同じ多摩川流域にある武蔵国府や武蔵国分寺系の瓦が主体となり、その関連性が強まったことを窺わせる。

a　単弁八葉蓮華紋軒丸瓦（第７図６・７）

２種類の単弁八葉軒丸瓦が創建瓦と考えられる。両者は外区内縁に鋸歯紋の有無によって異なる他は、紋様的に類似している。ともに瓦当は厚く、弁も平坦で、中房の蓮子は１＋６である。子葉

は勝呂廃寺などの比企地域にみられる瓦より、やや幅広で、長い。鋸歯紋のある１はＹ字型の間弁で弁を区画し、弁の先端がやや尖る形態であるのに対して、鋸歯紋のない２は弁の先端が丸味を持ち、弁が間弁でなく凸線で表現されるなど細かな部分では異なる点も多い。また、１には笵傷が進行した段階に瓦当裏面に縦置き型一本作りで見られるような突帯を持つものが存在する。（註２）突帯は先端が磨滅しているが、やや細く、補強粘土も確認できることから、一般的な縦置き型一本作りとは異なる。

２　上野国の単弁軒丸瓦

群馬県内では、上植木廃寺と同瓦窯跡の他に新里村新宮遺跡、同雷電山瓦窯跡、吾妻町金井廃寺、新田町入谷遺跡から上植木廃寺式の単弁八葉蓮華紋軒丸瓦が出土している。窯跡を除く遺跡は古代東山道や官道に隣接し、交通の要衝に設けられている。

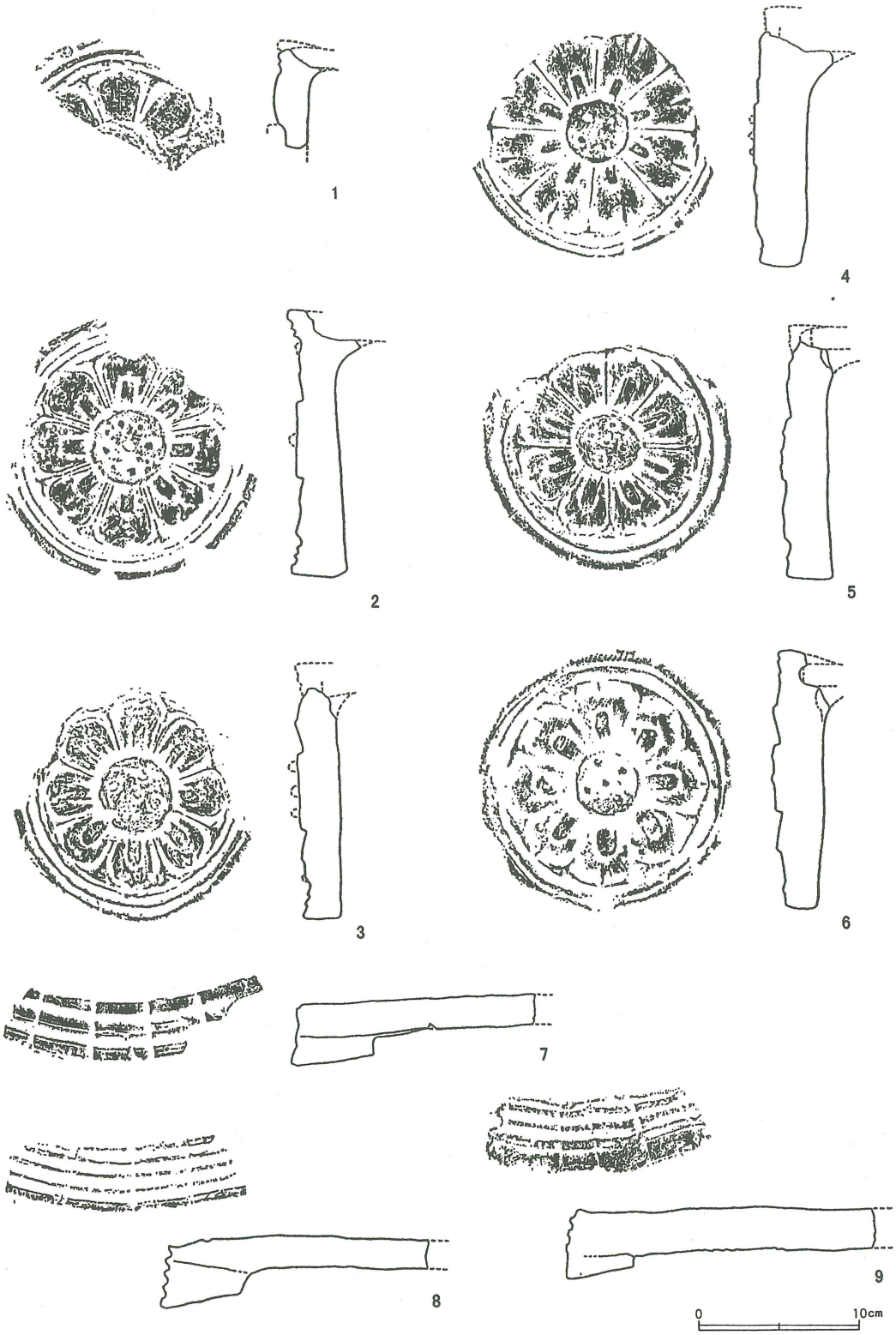
Ａ　上植木廃寺

上植木廃寺は伊勢崎市上植木本町他に所在し、発掘調査によって４箇所の基壇跡が確認され、金堂の北に講堂、南西に塔、南に中門、回廊は中門から金堂に取り付く伽藍配置である。寺院地の規模は明らかにされていない。創建瓦は中門の西方約160ｍに設けられた上植木廃寺瓦窯及び新里村雷電山瓦窯から供給されている。上植木廃寺の瓦については、本格的な整理が行われていないため不明な点が残るが、創建期の軒丸瓦は５種類、軒平瓦は６種類確認されている。（註４）

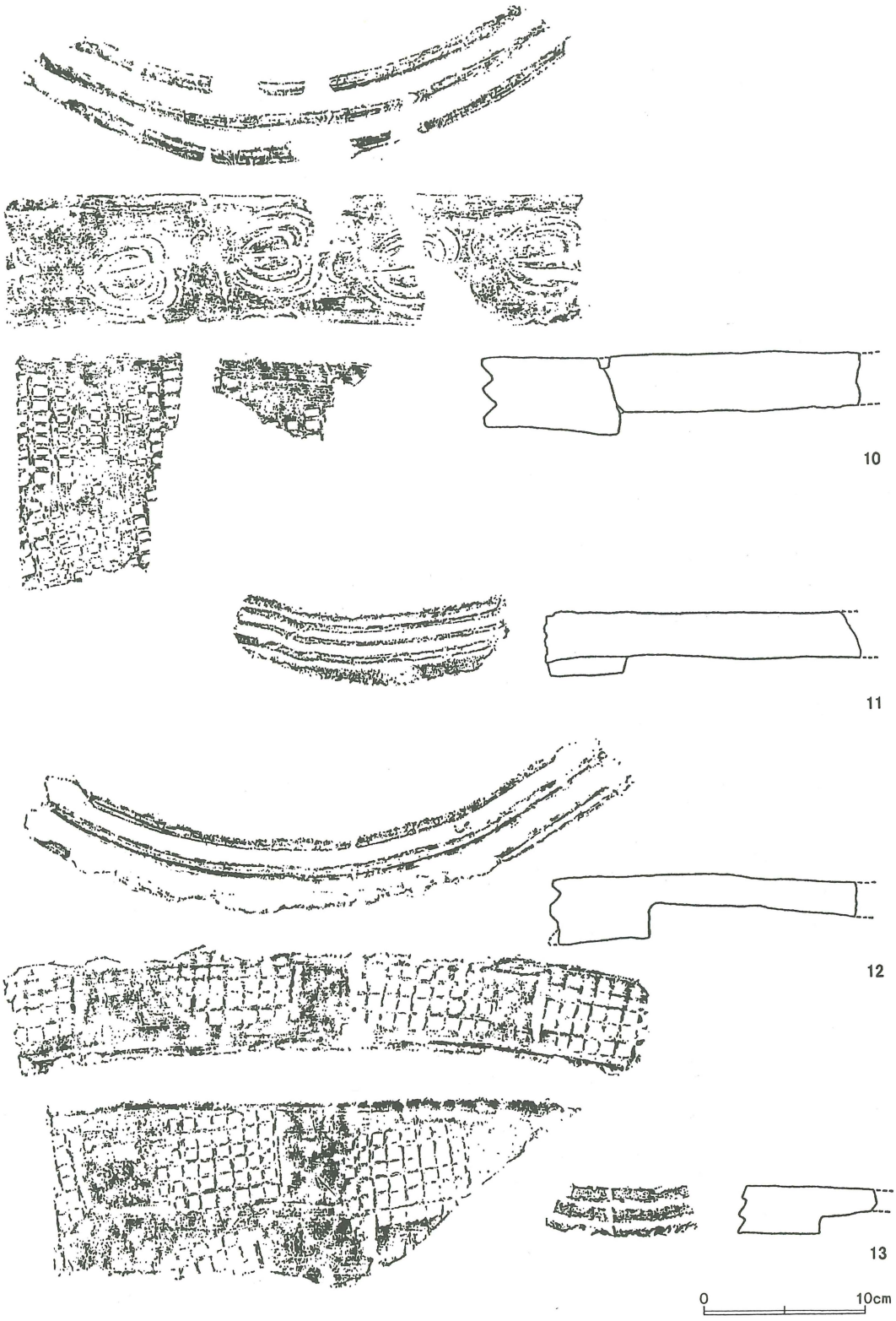
軒丸瓦はＡ01～05（註５）までが上植木廃寺式である。軒平瓦６種類は型挽重弧紋、廉状重弧紋を弧の数、施紋の時期（分割の前後）、顎面の施紋の有無などによって分類されるが、量的には廉状重弧紋が多い。廉状重弧紋は尾張元興寺との関連性が注目されている。

ａ　単弁八葉蓮華紋軒丸瓦（第８図１～６）

Ａ01は素弁（第８図１）と子葉を加えた単弁（第８図２）がある。素弁は４点の出土量であるが、既に笵傷があり、笵型も使い込まれた感がある。これに対して単弁は笵傷は残るものの、子葉を彫り加えた弁は素弁に比べて抑揚がある。丸瓦との接合は広端部凹面を削って加工するものと、未加工のものがある。Ａ02（第８図３）は量的に多く、蓮弁の周囲に輪郭線を持ち、弁端が大きく反転するのが特徴である。また、周縁の圏線は三重であるが、外側が広く、内側の２本が細い凸線で表現される。丸瓦の接合位置は90°と180°に分けられるが、他にずれることはなく、規則的な接合位置を保っている。Ａ03（第８図４）は中房の彫り直しにより２種類が存在する。Ａ03ではＡ02でみられた弁の輪郭線が外れ、弁端の反転も細く、低い凸線で表現される。全体に弁も中房も周縁も平坦で、圏線は二重になる。Ａ型笵の可能性が高い。丸瓦との接合は瓦当裏面に溝を彫り、丸瓦広端部の凹面を削って行う。Ａ04（第８図５）は（註６）Ａ03に比べて全体に盛り上がりがあり、周縁の幅が広くなる。蓮弁の割付はかなり崩れ、紋様の創出がやや曖昧である。笵型は外周部を削っているため、不明である。Ａ05（第８図６）は笵を彫り直したのか弁も高く、鋭角である。間弁は５種類の中で唯一中房に達しない。丸瓦との接合は瓦当裏面に溝を彫り、先端未加工のまま接合する。



第8図　上植木廃寺出土瓦(1)



第９図　上植木廃寺出土瓦(2)

3「棒状子葉」の系譜と年代について

「棒状子葉」の単弁軒丸瓦は、特定の地域における特異な瓦として扱われてきたが、広義おいては「山田寺式」の亜流と考えられることから、特異な瓦笵とはいえない。寧ろ、従来の「山田寺系」という軒丸瓦は紋様こそ似ているが、個々のデザインや製作技法などは異なることが多く、地方寺院ほどそれぞれの要素は強くなるように思われる。

勝呂廃寺単弁軒丸瓦の場合、瓦笵のつくりが上植木廃寺に似ており、上植木廃寺あるいは上野国内の関連する寺院などから伝播した可能性が考えられる。

上植木廃寺の創建軒丸瓦は5種7類あるが、その中でA02は出土量も多く、上植木廃寺を代表する瓦と言えるものである。この瓦がA03以下の瓦に影響を与えた可能性は高く、特に周縁はその特徴を色濃く残している。A02の特徴である斜縁の圏線や弁の状態やA03にみられる平坦な面形は、勝呂廃寺の単弁八葉軒丸瓦（第3図4）に共通するものがある。また、廉状重弧紋の存在も型挽と笵型、顎面施紋の有無などの違いはあるが、同じ系列上におけるものと考えられる。勝呂廃寺の廉状重弧紋（第3図5）は笵型による特異な形状であるため、かつては重弧紋の中で派生した軒平瓦と考え、年代的にも創建期より遅れるものと考えられてきた面がある。しかし、顎の長さや種類の豊富さや胎土、そして廉状重弧紋を意識したつくりであることから創建期の中に含めるのが妥当と考えられる。

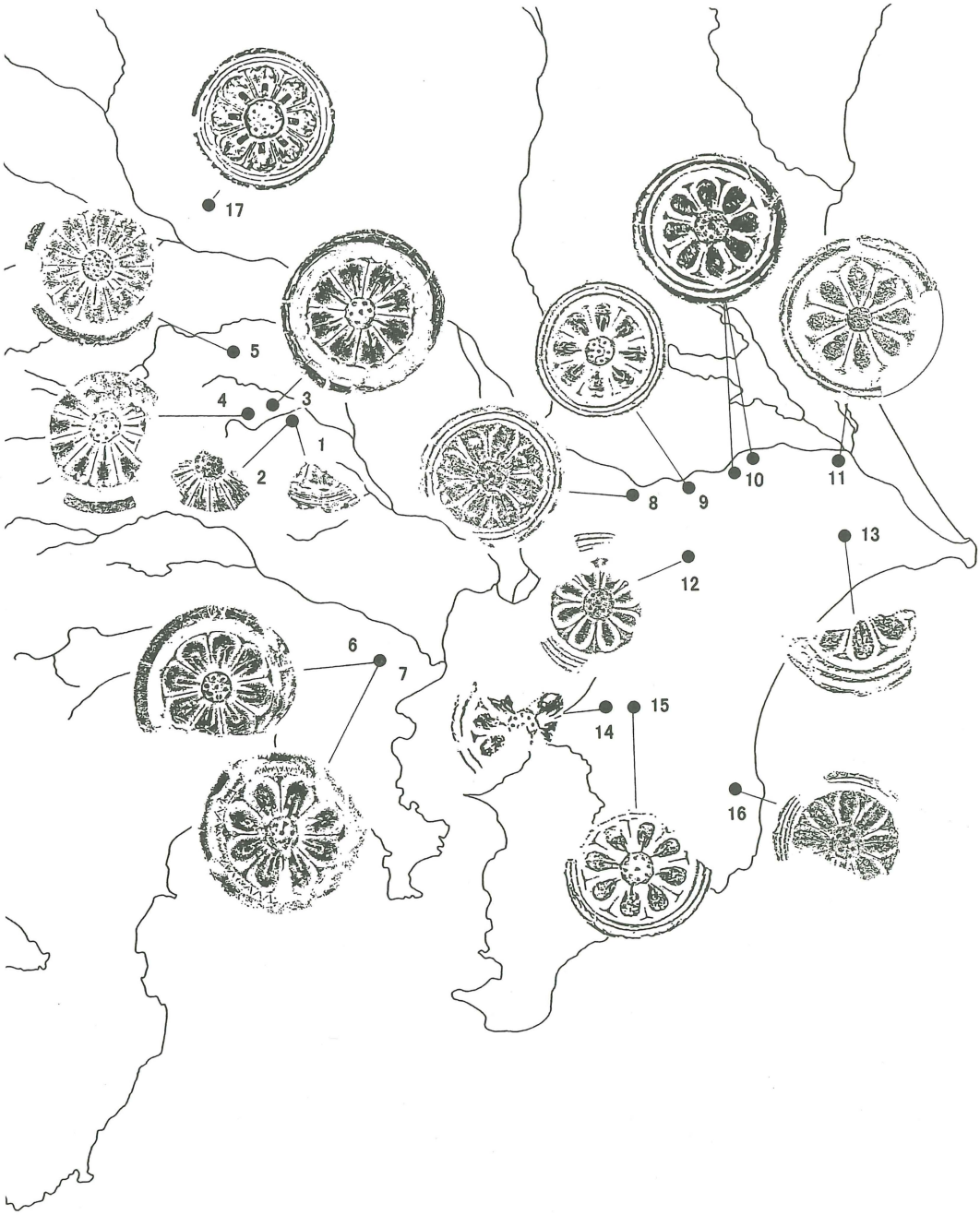
「棒状子葉」単弁軒丸瓦の年代については、生産の中心である赤沼古代瓦窯跡などから出土した須恵器との供伴関係から、勝呂廃寺や小用廃寺の創建瓦は7世紀の第4四半期前後から8世紀初頭にかけて生産されたと考えられる。（註7）赤沼古代瓦窯跡では2基の窯跡が調査され、他に4基ほどの窯跡が想定されている。これらは瓦陶兼業窯と考えられ、未調査の窯でまだ確認されていない笵種が生産された可能性がある。これに石田1号窯跡を加えて勝呂廃寺や小用廃寺、更には関連遺跡への供給を賄っていたものとみられる。

おわりに

比企郡周辺の「棒状子葉」軒丸瓦については「山田寺式」の系譜上にある「上植木廃寺式」の影響を受けて成立した可能性が高い。特に重圏紋の単弁八葉軒丸瓦（第3図4）は他の「棒状子葉」軒丸瓦に先行し、石田1号窯で出土している薄手の平瓦と組み合う可能性がある。また、従来は国分寺創建期に初めて上野系瓦の生産が南比企窯跡群で行われとされてきたが、実際には50年余り早く上野の瓦作りの技術が導入されていた可能性も高まった。

なお、本稿では笵の移動や流通関係等について論功を深めることはできなかったが、今回取り上げることができなかった房総地域や東北地方との比較・検討を含めて、今後の課題としたい。

また、 本稿を草するにあたり、下記の方々より御教示・御協力を賜った。記して感謝申し上げる次第である。江原昌俊、加藤恭朗、高井佳弘、浜田晋介、兵ゆりこ、渡辺　一。（敬称略）



第10図　関東地方の主要単弁軒丸瓦分布図

註

(1) 素弁軒丸瓦に伴う丸瓦・平瓦は褐色または赤褐色に、単弁の棒状子葉に伴う丸瓦・平瓦は灰色または暗灰色に焼成されているものが多い。

(2) この瓦当裏面の突帯は、縦置き型一本作りの軒丸瓦にみられるようなものであるが、実際に瓦当と丸瓦の接合は接合式によるものである。南武蔵に縦置き型一本作りは存在せず、量的に多く見られる北武蔵や上野国南部でも8世紀に入ってから、一本作りが導入される。一方、東京湾を隔てた下総国の千葉寺廃寺や上総国の光善寺廃寺や二日市場廃寺の軒丸瓦の中には、瓦当裏面に突帯を持つものがある。房総では縦置き型一本作りは存在しないことから、この突帯がそのルジメントとは考えにくい。瓦当裏面の突帯は、影向寺が東海道筋の寺院であることからも房総地域と技術的な関連があるのではないかと考えられる。また、二日市場廃寺や武士遺跡などの上総国の寺院・関連遺跡では、影向寺でも出土している凸面布目平瓦が出土している。

(3) 影向寺から出土した文字瓦（平瓦）には「天射志国荏原評」と読めるヘラ書きがあることから、評の時代には影向寺が存在したことを裏付けるとともに、創建瓦である単弁八葉蓮華紋軒丸瓦や三重弧紋軒平瓦が同時代の所産と考える根拠になった。また、郡（評）衙と考えられる遺構は寺院跡の南東約100mの地点に大型の掘立柱建物跡が数棟検出された。出土した土器などから7世紀後半から8世紀にかけての遺構であることから、橘樹郡（評）に関連する建物と推定されている。

(4) 上植木廃寺からはこれまでの調査等を通して膨大な量の瓦が出土しているが、未整理である。創建期の瓦については上記のとおりであるが、建物との組み合わせについては今後の課題である。また、上植木廃寺の創建瓦については、瓦当紋様や製作技術などから尾張元興寺との関連性が強いと考えられている。尾張元興寺の創建軒丸瓦にみられる「片ほぞ形」は、上植木廃寺では確認できない。下総龍角寺では創建瓦を改笵した際に「片ほぞ形」が導入され、技術的な流れが問題となっている。

(5) 軒丸瓦・軒平瓦とも高井佳弘氏が分類した番号を踏襲した。

(6) 未加工の丸瓦が1点出土している。全体量が把握できてないため、未加工のまま接合している場合も相当量存在するのではないか。

(7) 酒井清治氏は7世紀第3四半期の後半頃に創建の時期を設定している。緑山遺跡や立野遺跡から出土した須恵器の年代から推し量っての時期設定であるが、同じく7世紀第4四半期に創建年代を設定している上植木廃寺との関わりが問題である。「寺谷廃寺素弁軒丸瓦説」が実証されない以上、赤沼古代瓦窯跡や石田1号窯跡での出土土器との供伴関係から出された7世紀第4四半期という年代が妥当と思われる。

参考文献

出浦　崇　2002『上植木廃寺・上植木廃寺瓦窯跡』伊勢崎市教育委員会　第44集

今井　宏　1978『児沢・立野・大塚原』埼玉県教育委員会　第22集

上原真人　1993『蓮華紋』日本の美術4　No. 359　至文堂

木津博明　1997「上野国の初期寺院」『シンポジウム関東の初期寺院－資料編－』関東古瓦研究会

酒井清治　1982『緑山遺跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　第19集

1987「窯・郡寺・郡家　－勝呂廃寺の歴史的背景の検討－」『埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会　新人物往来社

高井佳弘・出浦　崇　2001「上野の山田寺式軒瓦－上植木廃寺の創建瓦を中心として－」『シンポジウム飛鳥・白鳳の瓦づくりⅤ』奈良文化財研究所

高橋一夫他　1982『埼玉県古代寺院跡調査報告書』埼玉県県史編さん室

辻　史郎　1997「下総国の初期寺院」『シンポジウム関東の初期寺院－資料編－』関東古瓦研究会

富田和夫　2002「飛鳥・奈良時代の官衙と土器」『シンポジウム坂東の古代官衙と人々の交流』埼玉考古学会

昼間孝志　1991「入間郡・高麗郡の古代寺院」『埼玉考古学論集』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、創立10周年記念論集

1997「武蔵国の初期寺院」『シンポジウム関東の初期寺院－資料編－』関東古瓦研究会

1998「武蔵寺谷廃寺の創建瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅠ』奈良国立文化財研究所

昼間孝志・木戸春夫・赤熊浩一　1999「武蔵寺谷廃寺の研究」財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、研究紀要　第15号

服部哲也　2001「尾張元興寺の創建瓦」『飛鳥・白鳳の瓦づくりⅤ』奈良文化財研究所

毛利光俊彦　1990「軒丸瓦の製作技術に関する一考察－笵型と枷型－」『畿内と東国の瓦』京都国立博物館

山路直充　2001「下総の山田寺式軒瓦」『飛鳥白鳳の瓦づくりⅤ』奈良文化財研究所

1999「東日本の飛鳥・白鳳の瓦について　－下総龍角寺と尾張元興寺－」『飛鳥・白鳳の瓦と土器－年代論－』帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会

山本　禎　1991『山王裏・中原』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　第98集

1997『山王裏・西浦・野本氏館跡』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団　第184集

渡辺　一　1997『町内遺跡Ⅰ－県指定史跡赤沼古代瓦窯跡灰原範囲確認調査報告書－』鳩山町教育委員会　第18集